

序：内在主義と外在主義の区別について

1 外在主義と内在主義：ダーウォルによる俯瞰図

何かをするよう道徳的に要請されるということは、やりたくなくてもそれをやるべきだということを含意しているように思われる。すなわち、道徳性には何らかの権威あるいは規範性があると普通は考えられている。おおまかにいえば、このように考えるのは正しいと主張する議論が内在主義といわれるものである。それに対して、正しくないとは主張する議論は外在主義とよばれる。ここでは内在主義と外在主義の区別について、スティーヴン・ダーウォル¹にしたがって概観する。

ダーウォルによると、内在主義か外在主義かの区別には二つの形態がある。すなわち、ある行為が道徳的に要請されることは行為するための理由となるかどうかの区別と、行為の理由があれば行為するための動機が生じるのかどうかの区別、がある。ただしダーウォル自身は、後者において行為の理由と動機の間に内在的な連関がないという立場については述べていない。その代りに、前者の形態では外在主義をとる立場であっても、大体はこの形態の内在主義を認めるだろうと論じている(ただし、どのような内在的関係をそこに認めるかによって三つの立場が区別される)。よってダーウォルによる内在主義か外在主義か

¹ Stephen Darwall, 'Reasons, Motives, and the Demands of Morality: An Introduction' (from Stephen Darwall et. al., *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches*, Oxford: Oxford University Press, 1997, pp. 305-312.)

の分類は、道徳性と理由の間に内在的連関を認めるかどうかに基づいてなされているといつてよい。

道徳性と理由の間の内在主義の主張は、「行為するための理由は次のような意味で道徳的要求に内在している。もしある人物が道徳的にある行為をすべきであるなら、必然的にその人物にとってのそれをする理由が、その人物がそれをするべきであるという事実もしくはその事実を裏づける考察の内に存在する」と要約される。対して外在主義はこれを否定し、道徳的理由は必ずしも行為するための理由とはならない、少なくとも行為しないという理由に優越する行為のための理由となるとは限らないと主張する。たとえ道徳的要請には本質的に権威があるように思われ、定言的に行為を拘束するように感じられる場合でも、そのような感じがするのは錯誤のせいであるかもしれないのだ。

実際、この意味での内在主義がなりたつかどうかは重要な問題となる。たとえばカントは、この内在主義をきちんと示すことが道徳性を哲学的に擁護することの核心であると考えていたのである。この内在主義がなりたつかどうかは、何が行為のための理由となるかについてどのような見解をとるかに依存している。たとえばフットのような外在主義者は、すべき理由がある行為とは行為者の欲求や利益を満たすものであるという見解をとっている。これは現代の社会科学等において広く受けいれられている見解であるが、行為者の利益を満たすことと道徳的要請に従うことが一致することを示すことができないかぎり、このような見解に基づけば行為の理由と道徳性との間には内在的な連関は存在しないという結論がでてくることになる。

道徳性と理由の間に内在的連関を認めていない論者としては他にウィリアムズが挙げられているが、ウィリアムズが実際に直接議論しているのは、理由と動機の間内在的連関についてであって、道徳性と理由の関係についてではない。しかしダーウォルは、次のような立場をとるだろうと述べている。「合理的熟慮には手段-目的関係に関わる道具的思考と目的間の相互調整のみが含まれる。したがって、道徳性が要請するものと合理性が要請するものとの間にいかなる連関をも期待するアプリアリな理由は存在しない」。このようなヒュームの立場であるとするれば、前の段落の最後の文で説明したとおり、たしかに外在主義ということになる。この形態での内在主義者としては、ゴーシェやネーゲルと共にコースガードの名が挙げられている。コースガードはウィリアムズを批判し、カント的な実践理性の擁護を行っている。

(かんざきのぶつぐ 博士後期課程)

2 ウィリアムズとコースガードの論争

ダーウォルは、理由と動機の関係については内在主義をとっている。しかし、理由と動機の間何らかの内在的連関を認めるとしても、それがその連関がどこにあるのか、という点でさらなる論争が生じている。この連関の所在をどこにおくかは、道徳と理由の連関に大きな影響を与えている²。

² ダーウォルによれば、ウィリアムズとコースガードが道徳と理由の連関を巡っては外在主義と

本報告では、この内在主義内部の論争の具体例として、バーナード・ウィリアムズとクリスティン・コースガードの立場を紹介する。しかしこの時、両者が理由と動機の関連について「何の内・外を論じているのか」を確認することが肝要である。というのも、内在主義自体に多様な形式が存在するため³、連関の所在がどこにあるか、内在／外在の焦点がどこにおかれているかによって、分類が大きく変わってしまうからである。

本報告で紹介するウィリアムズは「内在的理由と外在的理由」[紹介論文 1]⁴において理由の内在的解釈を展開している。この論文における彼の主張とは、「行為者 A には行為 ϕ する理由がある」という言明に関して、この言明が真となるには A の中に ϕ する動機があらかじめ存在する場合のみである、というものである。ここで注意すべきなのは、動機がどこにあるか、ということである。ウィリアムズが「内在」と言う時、動機が存在するのは、行為者の心的要素の中、具体的にはウィリアムズが「主観的な動機の集合」(Subjective Motivational Set)

内在主義とで明確に対立しているのは、理由と動機の連関に対する主張が異なっていることに基づいている。

³ダーウォルは、理由-動機内在主義の立場を判断内在主義(ex. ギバード、ヘア、スティーブンソン)、知覚内在主義(ex. プラトニズム、ウィギンズ、マクダウェル)、形而上学的内在主義の3つに分類している。ウィリアムズとコースガードの論争は厳密に言うならば、この啓示学的内在主義内部での対立ということになる。

⁴ Bernard Williams, 'Internal and External Reasons' from Stephen Darwall et. al., *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches*, Oxford: Oxford University Press, 1997, 363-371. 初出は Ross Harrison (ed.), *Rational Action* (Cambridge University Press, 1980)。ウィリアムズの *Moral Luck* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981)にも収録されている。本文中の引用のページ数は *Moral Discourse & Practice* のものである。

と呼ぶ心的要素の集合の中を意味する。それは決して理由言明そのもののものに「動機性」なるものが実在し、理由言明を認識するならば必ず動機付けられるという意味での内在主義ではない。従って、ここでの内在／外在の焦点は、動機が「主観的な動機の集合」の中にあるか否か、ということになる。

プラトニズム的な内在主義に関しては、ウィリアムズを批判するコースガードもまた否定する。従って、内在／外在の焦点を理由言明そのものにおく立場からは、コースガードだけでなくウィリアムズも外在主義者とされる。しかし、本報告では焦点をウィリアムズが規定する「主観的な動機の集合」においているため、ウィリアムズの立場から見れば、コースガードは外在的解釈をとっていることになる。というのも、ウィリアムズの主張では、理由の動機は「主観的な動機の集合」の中にあらかじめ存在していなければならないのに対して、コースガードによれば理由の動機は実践理性による熟慮を通して新たに作られる可能性が示唆されるからである。コースガードは、この点に関して、「ウィリアムズはカント主義的な実践理性への懐疑を行なっている」として、「実践理性についての懐疑」[紹介論文 2]⁵において直接ウィリアムズを批判している。

「熟慮を通じた理由の発見」という点に関してはウィリアムズも同意する。しかし、熟慮を通じて、「主観的な動機の集合」に存在しない欲求が理性の力によって形成される、という考えには反対するだろう。その理由のひとつにはウ

⁵ Christine Korsgaard, 'Skepticism about Practical Reason', in *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches* (Oxford: Oxford University Press, 1997), pp. 373-387. 初出は、*Journal of Philosophy* 83(1986, pp. 5-25) 。

ウィリアムズがヒューム的な意志決定のモデル、すなわち信念・欲求の組み合わせによって行為が決定されるというモデルを採用していることにある。ヒューム式の考えでは、理性はあくまでも道具的な存在に過ぎず、理由言明に関してあらたな信念同士、もしくは信念・欲求間の関係を発見するのには機能するが、それ自体欲求を形成するものではないからである。

となると、結局のところ、ウィリアムズとコースガードの論争の中にある主要な対立点は、行為と理由の関係に関して、ヒューム的なモデルを支持するか、カント的实践理性を支持するか、という一点に尽きるように思われる。この点に関して、ウィリアムズは前出の論文において自らの立場を明記しているが、コースガードについては「反省の権威」[紹介論文 3]⁶において動機の由来としてのカント的人間本性観が説明されている。

これらの議論は我々に対して、行為の動機の由来を問いかけると共に、行為に関してどのような人間本性のモデルを採用するか、という問いをも突き付ける。果たして、我々はどちらのモデルを支持するだろうか。それは以下の論文紹介を見た上で再度考えていただければ幸いである。

(ささきたく 博士後期課程)

⁶ Christine Korsgaard, 'The Sources of Normativity', in *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches* (Oxford: Oxford University Press, 1997, pp. 389-406). 初出は *The Tanner Lectures on Human Values*, vol. 15, edited by Grethe B. Peterson (Salt Lake City: University of Utah Press, 1994)。